

いました。古戦場小公園にもおいで下さり誠に有り難く、今回の見学会に深く感謝するものであります。

史跡探訪の記

佐藤 正映

今年の史跡探訪会は、天台宗の末席に名を列ねる者として、大変参考になる一日であった。国東半島一帯は殆ど訪ねているが、安心院・院内方面にも天台の遺跡や修行跡が多く、昔日の繁栄が目に見えぬ。特に「仙の巖」の威容には驚く。外観だけでなく、遺跡の発掘により、当時の様子が判明できたらと思う。

天台系ではないが、「地獄・極楽」も往時の信仰の深さに感心する。

私が住職を勤めている行橋市の隣町勝山にある「胸の観音寺」では、此処を大型としたような山を信仰霊場として、北九州一帯よりの信者が登ってくる。約壹千年の昔より絶えぬ信者を大事に導くことの責任を痛感している。

現在の世相を考えると、月に一度でいい、家族・友人と観音参りなどで憂さや悩みを晴らす事の素晴らしさを体感頂

きたい。

檜本の石仏群の威容さを見るにつけ、白杵のように風雨を凌ぐ対策を講じ、観光宣伝に力を入れたらと宇佐市に要望したい。

め歴史博物館には何度も行っているが、「み仏の美とかたち」に展示された仏像には圧倒された。翌日太宰府の国立博物館に出かけたが、大分の展示物の素晴らしさは、それに決して劣らないと思う。

私は終生の友として木彫りに励んでいるが、参考になる作品を拝見できて有意義な一日であった。役員の皆さんに感謝申し上げます。

桂昌寺跡 地獄極楽洞窟を見て

会員 清原 明

桂昌寺けいしょうじとは室町中期に開基されたが、江戸中期頃には無住廃寺となったと云う。江戸後期頃、一老僧が復興を悲願して、四国八十八カ所の霊場を巡礼している時、地蔵菩薩じざうぼさつの霊夢を受け、又江戸の傑僧「巍純ぎしゅん（午道法印）」と巡りあった。

老僧はこの巍純に事情を話し霊夢のことを告げ懇願して、

この桂昌寺跡に案内した。

案内された魏純（午道法印）は近郷の村人に辻説法で桂昌寺の復興を説き、協力して本堂から庫裏まで再建した。さらに引続き堂の裏側の岩山に約七〇メートルの洞窟を掘り、物語にある地獄極楽の洞窟を完成させた。

この洞窟を地元古恵良菊男先生よりユーモアを交えての物語で案内して頂いた。

洞窟に入ると前後左右に沢山な石仏で一杯、洞窟の順路は、物語にある様に、亡くなった人は、先ず六地藏に案内され、閻魔大王をはじめ十王から、裁判を受ける。ここに小さな池が在り水鏡となっており、そこで顔を映して地獄か極楽が決まる。



安心院富貴野の滝

地獄では馬頭・午頭の赤鬼、青鬼に引きずられて三六メートルの地獄道を進む、途中「三途の川」「奪衣婆」「賽の河原」と地藏菩薩「赤鬼青鬼のいる血の池地獄」が迷路となっている。地獄道を無事抜けると、今度は菩提坂を越えて二四メートルの極楽道となる。

途中に十三仏が安置され、この十三仏に救われて、明かす彼岸（極楽）に着く、ここには「来迎弥陀」「観音菩薩」「勢至菩薩」が一緒に迎えに来てくれる。

岸壁には「南無阿弥陀仏」の六文字が彫られた石碑が立っている。一方洞窟の中央部（来迎仏の横）より垂直の縦穴五メートルがあり、鎖づたいに登ると丘の上に出る。そこには阿弥陀如来像（二メートル）をはじめ多くの菩薩が安置され、豊後富士や鶴見岳も見え、まるで極楽の世界に居るような気持ちとなる。

この様な構図の洞窟・私ごとき無知職な者には仏様の名前一つ解らない、只想われることは、今より三〇〇年ぐらい昔廃寺となった寺を再興しようとした一老僧・魏純と云う江戸の傑僧・その働き、それに協力した村人、長い歳月の掘削、頭の下がる思いで一杯であった。今の時代にこの様な後世に残す遺跡が造れるであろうか疑問を抱いた。